

『今月の天候と農作業』

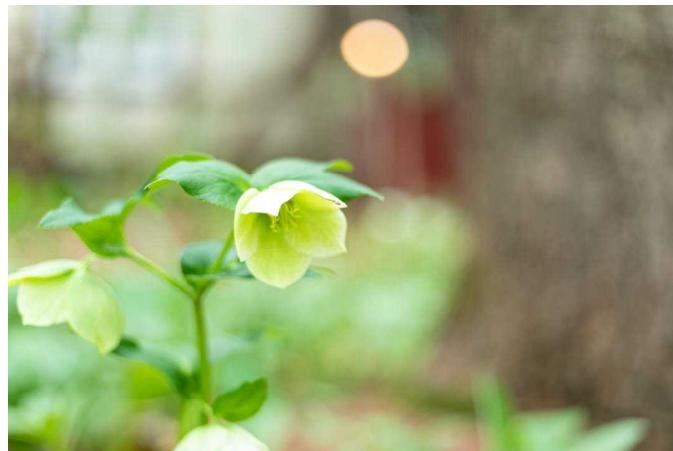
通巻第5658号

12月号

令和3年12月2日発行

宮崎県

宮崎地方気象台



【予報のポイント】

ほぼ平年並の天候となる見込みです。

【確率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	30	30	40
降水量	九州南部	30	40	30
日照時間	九州南部	40	30	30

【予想される向こう1か月の天候】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。
週別の気温は、1週目は、平年並の確率50%です。2週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

<1週目の予報> 12月4日(土)～ 12月10日(金)

高気圧に覆われて晴れる日が多いですが、期間の中頃は気圧の谷や湿った空気の影響で曇る日があるでしょう。

<2週目の予報> 12月11日(土)～ 12月17日(金)

天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

<3週目から4週目の予報> 12月18日(土)～ 12月31日(金)

天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

※明日から1週間の、日別の天気や気温などは、週間天気予報

(<https://www.jma.go.jp/bosai/forecast/>)を参照してください。

普通作物

◆水稻

1 ほ場の準備

土作りは良質米の安定生産の基本です。堆肥は地力や前作を考慮しながら、牛糞堆肥で、10a当たり1tを目安に投入します。ケイ酸質資材は稻の茎葉を硬くし、倒伏防止や耐病性、品質食味の向上に効果があるため、地区基準や土壤診断結果を基に施用しましょう。ロータリー耕だけでは作土が浅くなるため、プラウによる深耕を行い、根域を15cm以上確保しましょう。

また、スクミリンゴガイ（ジャンボタニシ）の対策として厳寒期の耕うんが効果的です。発生ほ場では、トラクターの走行速度を遅くし、ロータリーの回転数を早くすると、殺貝効果が高まります。

2 種子の準備

種子の自家更新は、異品種混入やイネシンガレセンチュウ、ばか苗病等の発生の恐れがあるため、採種ほど生産された種子を利用しましょう。

複数の品種を扱う際は、異品種混入に注意し、資材の清掃やラベルの確認等を行いましょう。

◆麦類

1 播種・排水対策

平坦地の播種適期は、12月上旬頃までです。播種が遅れる場合は、播種量を増やし、茎数を確保します。発芽後の湿害防止のために、播種前に作溝して排水対策を行いましょう。

(福川 泰陽)

施設野菜

◆施設野菜全般

気温の低下に伴い、暖房経費の負担が大きくなっています。「小さな対策の積み重ね」が大きな経費削減につながりますので、身近なところから万全の対策を実施します。

◆きゅうり

促成の摘心栽培では子～孫づる、つる下ろし栽培では主枝となる子づるの収穫期です。摘心栽培では採光・通風を良くするため、孫づるまでは規則的に摘心し、ひ孫以降は生長点を数本確保しながら、込み合った場所の枝を中心に整理します。また、生長点の動きが悪くなってきたら、放任して草勢の回復を図ります。つる下ろし栽培でも着果が安定してきたら、午前中は空中湿度を確保するため、内張りビニルの開閉により湿度調節を行います。開花位置が上昇してきたら、夜温設定を上げて、幼果の摘果を行います。追肥は定期的に行い、草勢維持に努めます。

◆ピーマン

促成栽培は収穫と併せて懷枝（ふところえだ）及び側枝を整理します。整枝法は、低位節から発生している徒長枝は根元から除去し、第3～4分枝の懷枝は、収穫が終わったら1節を残し適宜切り戻します。また、第1分枝より下の本葉はうどんこ病やコナジラミの発生源となるので、隨時除去します。

◆トマト

促成栽培の大玉トマト、ミニトマトとともに収穫期です。気温の低下に伴い、晴天時でも谷窓が開かなくなるため、炭酸ガス施用の効果が高くなります。早朝加温や日中加温を行うと、光合成の効率が上がり、生育が促進されるとともに、病害の抑制効果も高まります。また、天候が悪くなると裂果の発生が増加するため、施設内の湿度が上がらないように注意が必要です。

◆いちご

頂花房の収穫と第1腋花房（2番果）の肥大期となります。着果負担も大きく、草勢が低下すると第2次腋花房（3番果）以降の収量、品質に影響しますので、かん水不足・肥料切れに注意します。一方で低温期は吸水量、吸肥量ともに低下しますので、かん水、追肥とともに生育を見ながら控え気味に行います。

（吉山 健二）

葉茎根菜類・いも類

収穫が終了したほ場では、次作に向けた土づくりを行います。排水の悪いほ場でサブソイラ耕を行う場合は、土壤が乾燥した状態での施工が効果的であるため、ほ場の状態を見てタイミングを逃さないように作業しましょう。

◆にら

促成栽培の収穫期です。無加温栽培では、過湿による白斑葉枯病の発生や凍害による葉先のヤケが発生する恐れがあります。薬剤による予防的な防除を行い、残さをハウス外に持ち出すとともに、除湿、保温に努めます。

加温栽培では、最低夜温を5℃に設定しますが、刈り取り後3～4日間だけを10℃に設定にすると、萌芽が早く、丈夫な株になります。

◆さといも

収穫が終了したほ場は地温の低下に伴い残さ分解が遅くなるため、次作の病害対策として、直ぐに残渣の片付けを始めます。トラクターの走行速度を遅くし、ロータリー回転を早くすると、残さが細かく破碎され、分解が早くなります。また、残さをほ場周辺等に放棄しないようにしましょう。

次作の種いもを栽培ほ場でそのまま保管する場合は、畦上に多めに土壤を被せて寒さに当たらないようにしましょう。

◆ごぼう

トンネル栽培は今月上旬までが播種期です。発芽適温は20～25℃で、30℃以上では発芽率が低下するため、高温時には換気をします。特に、トンネルビニルが新品の場合は高温になりやすいので注意が必要です。

◆にんじん

トンネル栽培は今月上旬までが播種期です。地温が低いと発芽までの日数がかかり、不揃いになるため、トンネル内の温度を25～28℃で管理し、30℃以上になる時は換気をします。発芽後、1月下旬の肥大期までは同様の管理を行います。

◆かんしょ

育苗ハウスの消毒準備期です。前作の残さが残っていると土壌消毒の効果が劣るため、土壌消毒前に育苗ハウス内の隅々まで残さを除去します。除去できない残さは、分解を進めるため入念に耕耘します。また、再汚染を避けるために消毒した育苗ハウスの作業は、他のは場の作業前に行います。

(川崎 佳栄)

果樹

1 常緑果樹

◆ 露地柑橘の病害虫防除

ハダニやカイガラムシ類の越冬虫数を減らすため、マシン油乳剤を散布します。この剤は、虫が呼吸するための気門を塞ぐことで殺虫しますので、枝や葉に十分な量を散布しましょう。なお、樹勢が弱い樹には冬の散布は避け、3月上旬頃の発芽前に散布します。

◆ 完熟きんかん

果実肥大が十分に確保されている園では、昼間の温度は15°C程度を目安に管理し、着色促進に向けて管理します。秋季加温管理を行っていた園でも徐々に温度を落としていきます。

成熟が進んでくると高温と高湿度により、水腐れや裂皮が発生します。早朝の換気に努め、施設内温度を低く維持しましょう。

◆ マンゴー

秋季夜間冷房を実施した園では出蕾や花穂の伸長が見られています。出蕾後、急に温度を上げると葉芽になりやすく、花が咲いた場合でも結果率が低いことが懸念されます。花芽の発生状況を確認しながらじっくりと温度を上げ、充実した花を確保します。

2 落葉果樹

◆ 基肥の施用

落葉果樹は、柑橘類などの常緑果樹と違い、根の活動が始まるのは2月上旬頃と早い傾向にあります。このため、ナン、クリ、カキなどは年内に基肥を施用しておきます。ただし、発芽不良が多いナシ園では秋冬期の施肥は見送り、春肥で補うようにします。

◆ クリの剪定

多収生産のためには、剪定が非常に重要です。隣の樹と枝が当たるようであれば、まず間伐や縮伐を実施します。剪定は、弱小枝をすべて除去し、基部の太さが8mm以上、長さ50cm程度の充実した結果母枝を1m²当たり5本程度になるように整理します。

3 果樹園共通

◆ 石灰の施用

土壌の酸性化は肥料の吸収や根の生育を阻害し、樹勢低下を招きます。土壌分析を行い、酸性の場合は石灰質資材で調整しましょう。

(鈴木 美里)

花 き

◆電照ギク

「神馬」系統は10℃以下の低温に遭遇すると開花遅延を起こす恐れがありますので、消灯までは夜温を実温13℃（低温開花性系統は12℃）で管理します。なお、消灯前に低温に遭遇した場合は、消灯2週間前から夜温18℃（低温開花性系統は15℃）で予備加温を行いましょう。

また、消灯後に四段サーモを用いた変夜温管理を行うと、開花が大幅に遅れることなく、暖房コストの削減が可能です。

◆スイートピー

気温の低下に伴って品質が安定し、出荷量が増加する時期となりますので、つる下げ等の作業を早めに行い、適切な草勢の維持を心がけましょう。

また、年明け以降の灰色かび病発生リスク軽減のために、微生物農薬のダクト散布を継続的に行いましょう。

◆デルフィニウム・エラータム系

1番花収穫前から2番花の抽だいが始まっている株もありますので、出荷計画に合わせた温度管理が重要となります。

1番花出荷終了後の夜温管理は、ロゼット回避型（1～2月出荷予定）では抽だいまで15℃、ロゼット打破型（3～4月出荷予定）では30～40日間低温処理してロゼットを打破した後、10～15℃で行いましょう。

◆トルコギキョウ

気温が下がると施設内の湿度が上がり、花シミの発生リスクが高まります。

発芽から開花期に加温することで花シミの発生が減少し、品質並びに日持ち向上にもつながりますので、換気除湿等の除湿対策と夜温15℃の加温を行いましょう。

◆ラナンキュラス

ハウス内の温度が下がりすぎると光合成速度が低下して生育の停滞につながりますので、日中は15℃程度を目標に温度管理を行います。

また、1番花の収穫開始に伴い草勢が低下するケースが見られますので、硝酸態窒素主体の液肥を適宜施用して草勢の維持を図り、安定的な採花を目指しましょう。

（藤原 明紀）

畜産

◆ 家畜防疫対策

鶏では、11月10日に、秋田県において、今シーズン初めての高病原性鳥インフルエンザが発生しています。

本県においても、感染リスクが高まっていますので、防鳥ネットに破れ等がないか、点検し、破れ等があれば補修をしてください。

家畜伝染病から農場を守るため、畜舎内外の消毒はもとより、人・車両・物資の消毒と野生動物の侵入防止対策を徹底し、飼養衛生管理基準を遵守してください。

◆ 家畜

本格的に寒さが厳しくなり、朝晩の気温が急激に低下する時期です。幼畜は、温度変化に特に弱いため注意が必要です。適切な温度管理と換気を行いましょう。

特に、子牛は、寒さに弱いため、牛体に風が直接当たらないようコンパネやシート等で風を防止します。また、コルツヒーター等の保温器具を活用し、防寒対策を実施します。ただし、子牛の腹部が濡れた状態では疾病を発症しやすくなるため、敷料をこまめに取り替える等、床は常にきれいで乾燥した状態にします。

また、牛舎内の温度維持のため牛舎をカーテン等で閉め切ります。ただし、アンモニアガス等による呼吸器病等の発生リスクが高まりますので、舎内のこまめな換気に注意します。

◆ 飼料作物

極早生品種のイタリアンライグラスや晚夏播きのエンバクの年内収穫の時期です。飼料作物の栽培においては、飼養管理に影響がでないよう計画的な作業を行い、良質粗飼料の確保に努めます。

(藤井 真理)

特用作物

◆茶

1 茶樹の凍害対策

気温の低下に伴い茶樹の耐凍性は徐々に高まりますが、急激な低温が予想される場合、本年中切りを行った茶園等では冬芽凍害（芽つぶれ）や裂傷型凍害（幹割れ）が発生しやすくなります。

防霜ファンやスプリンクラーを利用して防寒対策を実施する場合は、実際の気温とセンサーの温度との差をチェックした上で、設定温度を0℃とし冬芽の耐凍性獲得状況を確認しながら実施しましょう。

また、幼木園では株元への敷きわら等を実施してください。

2 カンザワハダニ・チャトゲコナジラミの防除

一番茶の収量や品質に対する影響が大きいカンザワハダニは、冬期でも産卵する個体が多いため、越冬前後の防除により密度を下げることが重要です。防除の際はチャトゲコナジラミとの同時防除に努め、事前に裾刈りを行い、裾部や葉裏への薬剤付着状況を確認しながら、地域の防除暦に従って散布しましょう。

3 新・改植園の準備

茶園の有効土層は60cm程度といわれていますが、茶の根は1m以上伸びることもあり、来年の春に新・改植を予定しているほ場では少なくとも60cm、可能であれば1m以上の深耕や天地返し等を実施し有効土層を確保しましょう。

また、土壤pHの矯正や排

水対策等も実施しましょう。

(松尾 啓史)

◆しいたけ

1 原木の玉切り

原木伐採後、四十～六十日程度の葉枯らし乾燥が済んだら玉切り作業を行います。玉切りの適期は、①若い木では木口面に半径の3分の2程度、老齢木では樹皮近くまでひび割れが入ったとき②小枝を折り曲げるとササクレ状に折れるとき③小枝の内樹皮が褐色に変わると、とされています。また、作業性が良いように、一～一・二mを目安に切り揃えます。

2 植菌

玉切り後は、害菌や害虫の侵入防止のため早めに植菌を行います。特にドリルで穴を開けた場合は乾燥を防ぐため、その日のうちに植菌します。

種菌は、栽培条件や目的に合った品種を選定します。

植菌（種駒）数は、原木末口直径（cm）の2倍程度の数とし、植菌間隔は縦に長く、横に短くし、千鳥状に行います。樹皮に傷がある場合や枝の切り口がある場合は周囲に余分に植菌して、害菌の侵入を防ぎます。大径木、老齢木は樹皮が厚いので、種菌が財部に届くようやや深めに接種しましょう。

（堀川 和也）

◆たばこ

今月は来年作に向けての準備が主な作業となります。

1 葉たばこの大きな減収要因である立枯病・疫病等の、土壤伝染性病害の菌密度の低減と、土壤消毒の効果を向上させるため、冬期耕耘を十日おきに三回以上行いましょう。また、溝堀機等を用いて排水溝を完備し、耕種的防除に努めましょう。

2 土壤消毒を実施する際には、農薬使用基準に沿って薬害・公害の無いように、最大の注意をはらいましょう。特にピクリン剤による土壤消毒は、塩素グレー葉生出の原因ともなるので、使用量、使用時期に十分注意しましょう。全面消毒を実施する場合は植付三ヶ月前までとなるので、今月中には終了しましょう。

3 肥料の分解を進め、初期生育を促進するために未熟堆肥の使用を避け、施肥畦立は、植付一ヶ月前までに完了しましょう。特に水田は、年内施肥に努めましょう。また、収量・品質低下の要因となる小柄な生育不良作を改善するために、畦立は水分の多い時期の「練り畦」とならないよう土壤水分の良い時期に行いましょう。

（宮崎県たばこ耕作組合）

内容の詳細について

1 12月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県総合農業試験場及び森林経営課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病害虫の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。
(<http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>)

向こう1カ月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

農作物名	病害虫名	発生量	発 生 状 況 と 防 除 対 策
施設果菜類	病害一般	一	暖房経費低減のため、ハウスを多層・多重被覆にしているところでは、施設内が多湿になりやすく病害の発生が助長されるので、換気や早朝加温など適切な温湿度管理に努めます。
冬春きゅうり	べと病	並	いずれの病害も多発してからでは防除効果が低くなるので、予防に重点をおき、発生が見られたら初期防除を徹底します。
	うどんこ病	やや少	うどんこ病は乾燥時に多発するので、ほ場内が過乾燥にならないように管理します。
	褐斑病	並	
	黄化えそ病 (MYSV) ミナミキイロアザミウマ	やや多 やや多	キュウリ黄化えそ病の発生がやや多くなっています。発病株を確認した場合は直ちに抜き取り、適切に処分します。また、本病を媒介するミナミキイロアザミウマの防除を徹底します。
	タバコナジラミ	やや多	多発してからでは防除が難しくなるので、発生を確認したら早めに防除します。
	病害虫全般 (改植時の留意点)	一	ウイルス病を媒介するコナジラミ類やミナミキイロアザミウマに対しては、前作のきゅうりを抜根する前の防除を徹底するとともに、抜根後は少なくとも20日間蒸し込みます。
冬春ピーマン	斑点病	やや多	うどんこ病は、乾燥時に多発するので施設内が過乾燥にならないよう注意します。一方、うどんこ病以外の病害は、多湿条件で発生しやすいので、ハウス内の温湿度管理、排水対策等を徹底します。
	うどんこ病	やや多	いずれの病害も、予防・初期防除を徹底し、罹病した枝葉は感染源となるので、発見したら直ちに除去し、ほ場外に持ち出します。
	黒枯病	並	
	ミナミキイロアザミウマ	やや多	ピーマンの微小害虫の発生が多くなっています。ミナミキイロアザミウマは多発してからでは防除効果が低くなるので、低密度のうちに防除を徹底します。ヒラズハナアザミウマは、早めに防除し、密度の抑制に努めます。
	ヒラズハナアザミウマ	多	
	タバコナジラミ	多	両種とも青色粘着板による誘殺に取り組み、生息密度を抑制します。
冬春トマト	葉かび病	並	葉かび病・すすかび病は、多湿条件で発生しやすいので過繁茂にならないように管理を行い、ハウスの換気を良くします。病勢が進展してからでは防除効果が低いので、発病を確認したら早めに防除します。
	すすかび病	やや多	薬剤の感受性低下（耐性菌の出現）を防ぐため、薬剤のローテーション散布を行います。うどんこ病は、乾燥時に多発するので、換気の際に過乾燥にならないように注意します。
	うどんこ病	やや多	
	トマト黄化葉巻病 (TYLCV) タバコナジラミ	並 並	トマト黄化葉巻病の発病株は伝染源になるので、必ず株全体を抜き取り土中に埋めるか、ビニル袋に入れて枯れるまで密閉します。
冬春いちご	うどんこ病	並	うどんこ病は、予防に重点をおくとともに、罹病葉・果実は伝染源となるので速やかに除去します。
	炭疽病	やや多	炭疽病を発病した株は早期に除去し、新たな感染を防止します。
	ハダニ類	並	
	アブラムシ類	やや少	ハダニ類は寄生数が増加してからの防除は難しくなるので、低密度時の防除を徹底します。なお、薬剤感受性が低下しやすいので同一系統薬剤の連用は避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を心掛けます。
	ヒラズハナアザミウマ	並	また、天敵カブリダニを積極的に利用してください。
かんきつ類 (露地栽培)	ミカンハダニ	並	マシン油乳剤は、薬剤感受性の低下した個体群に対しても効果が期待され、またカイガラムシ類との同時防除も可能であるので、樹勢が弱っていないことを確認し防除します。
茶	カンザワハダニ	やや多	カンザワハダニの発生が多くなっています。密度が高いほ場では、春先の発生量が多くなり、減収、品質低下の原因となるため、マシン油乳剤等による防除を行います。

- 1) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。
 2) 病害虫防除・肥料検査センターのHPアドレスは、<http://www.jppn.ne.jp/miyazaki> です。

